

かにかくに
(吉井 勇)

かにかくに
祇園は
こひし
寐るときも

枕の
下を
水の
ながるる

作者 明治十九年(一八八六)、薩摩藩勤王運動の志士の血を引く名門、伯爵吉井幸歳の東京芝高輪の邸に生まれた。早稲田大学中退後、少年時代から師事していた与謝野寛の新詩社に加わって活躍、観潮楼歌会にも出席するほどに早くから認められている。明治四十一年、北原白秋・木下杢太郎らと退社して「スバル」を創刊するに到り、その華麗な詞調と奔放な情緒とによって、もつとも大衆的な流行歌人となった。明治四十三年若冠二十五歳で刊行した「酒ほがひ」と大正四年刊行の「祇園歌集」とが代表歌集といわれる。歌集二十余冊、歌数二万首に及ぶ多作を貫ぬいて、昭和三十五年、七十五歳で永眠するまで、艶やかで明快な朗誦にふさわしい吉井勇調が流れている。

語釈 ※かにかくに〓このように。とやかくと。あれこれと。ともかくにも。※祇園〓京都の代表的な花街。※寐るときも〓料亭などで芸子舞子とともに仮寝する「雑魚寝」と呼ばれた遊興を意味する。※祇園の料亭には、近くの賀茂川に注ぐ小支流のうえに床を突き出して建築されたものが多い。

通釈 あれこれと、それはともかく、京の祇園は恋しい。寝るときでさえ、枕の下を流れてゆく水の音が聞こえる、